

学 位 論 文 要 旨

研究題目

子どもの心理社会的発達に母親の強迫症症状、特に巻き込み行為が及ぼす影響に関する探索的検討

(A preliminary investigation regarding the impact of OCD symptoms, especially involvement behaviors of OCD mothers, on the psychosocial development of their children)

兵庫医科大学大学院医学研究科

医科学専攻

高次神経制御系

神経精神医学（指導教授 松永 寿人）

氏 名 萩野 俊

本研究は、巻き込み行為を伴う強迫症(Obsessive-Compulsive Disorder: OCD)を有する母親の子どもにおいて、母親の OCD 発症時期が心理社会的発達に及ぼす影響を探索的に検討したものである。OCD は患者本人のみならず家族全体の生活機能に影響を及ぼし、とくに子どもが巻き込み行為の対象となる場合、発達への悪影響が懸念される。しかし、発症時期の違いに着目した研究は乏しい。

対象は、兵庫医科大学病院精神科神経科に通院中の OCD 患者である母親と、その影響を幼少期より最も強く受けってきた 10~18 歳の子ども 17 組である。母親の OCD 発症が出産前であった産前発症群と、出産後であった産後発症群に分類し、比較検討を行った。母親には Y-BOCS を用いて強迫症状の重症度評価を行い、子どもに対しては CBCL、SDQ を中心とした複数の心理尺度を用いて、情緒・行動・社会性・認知機能に関する評価を実施した。

その結果、産前発症群の子どもでは、CBCL における総得点、社会性、思考、注意の問題が産後発症群より有意に高値であり、SDQ では向社会的行動が有意に低値であった。一方、不安や抑うつ、ADHD 症状に特異的な尺度では明確な群間差は認められなかった。これらの結果から、母親の OCD が出産前に発症し、慢性的な巻き込み行為が発達初期から存在する場合、子どもの心理社会的発達に持続的な影響を及ぼす可能性が示唆された。本研究は、母親の OCD 発症時期という視点から子どもへの影響を明らかにした点で意義があり、今後の予防的介入や家族支援の在り方を検討する上で重要な知見を提供する。